



TITLE:

七月例会

AUTHOR(S):

高城

CITATION:

高城. 七月例会. 天界 1935, 15(172): 395-395

ISSUE DATE:

1935-07-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167067>

RIGHT:

はれながら、岡山より御出席になられた水野千里氏が立たれる。氏の講演を初めて聞く人は黑板に書かれた東亞天文協會副會長の肩書にどんな難かしい話が出るのかと静まると、先づ机の上に持出された珍妙、非常時バツグ變形風呂敷の説明に初まり、自分の服裝が春夏秋冬を兼ねてゐると茶色の上衣、白い夏のチョッキ、黒い冬のズボンを一々引張つて説明され一同をワツと笑せられる。笑聲の納まらぬ内に黑板に大きく春夏秋冬と書かれ四季の話から月、日、時へ話を持つて行かれる。同じ日本人でも本州と臺灣と南洋東部、中部に住む人を今直ぐ集めて時計を調べると一時間づゝちがつてゐると云ふ様な話し方で経度による時刻の變化、日付變更線等を話される。前列に並んでゐる中學生諸君が大喜びである。

八時卅分講演は終り、直ちに卅糎屈折鏡で觀望が開始される。ドームの巨口が南天に開いて秋の様に澄んだ空の月、木星、火星等を順次觀望し、屋上では中村氏彗星搜索機が二重星を巡つてゐる。來會者に充分の満足と興へて午後十一時この六月例會は大盛況裡に閉會された。(6. 18 宇野)

七 月 例 會

七月13日夕、この日期待された納涼會も朝からの雨模様のため、來集した人々は顔馴染の會員約20名、多くは京都支部の會員達であつたが大阪より臨席された熱心な方々もあつた。三伏の暑さを忘れて涼風を入れながら、一同落付いた氣分で 山本一清先生の『平石時光の天文學』を聴く、先生はつい最近彦根の城下で獨歩の業績を遺した一天文學者平石時光(1696—1771)を發見されるに及び、屢々その遺業を尋ねて同地へ出張され、相繼いで莫大な且貴重な資料を發見され目下之等の資料につき分類と整理研究の途上であり、天文と數學、殊に曆術への偉業は實に驚異と敬服に値するもので、尙この外、多方面の學術的の手記・著作等が續々發見されてゐる由である。席上には精密な天文分野之圖や、手記・年表等を並べられ、聴く者はこの深い興味と今後の先生の研究結果への盡きざる期待と關心とを持つて、誇るべき碩學の遺業を偲び、夜更くるまで相語り合つた。曇天のため觀測は中止する。(高城記)